

2019 年度 事業報告書

NPO 法人ゆいツール開発工房^{ラボ}

目 次

1.	団体の設立趣旨	1
2.	団体の目的と主な事業	2
3.	団体の役員	2
4.	会計報告	2
5.	活動報告	4

1. 団体の設立趣旨

つながりあう社会へ

私たちは今、高度な効率化・情報化がすすんだ、便利な社会に暮らしています。

しかしその裏で、人と人の繋がりは薄れ、深い孤独感が蔓延し、地域コミュニティが崩壊するなど、社会の問題も深刻化しています。

世界では、これまで貧しいと言われていた国々が急激に発展し、豊かさを享受する人が増える一方で、開発による環境破壊、貧困格差、エネルギー・資源をめぐる問題など、多くの深刻な事態も表面化しています。

そんな中起きた東日本大震災と原発事故は、私たちにコミュニティの大切さとその危機を痛感させました。

今、こうした数多の問題を抱える社会を生きていくためには、多様な情報や選択肢から、自ら考え、選び、行動する力を一人一人が身につけることが肝要です。しかし過剰な情報や便利すぎる社会はその力を奪い、生きる力を弱めています。

ゆいツール開発工房^{ラボ}の主メンバーは、環境省の体験的な学びの場づくりに6年以上携わってきました。その現場経験の中で、市民の手による課題解決の必要性和、コミュニケーションによる学び合いの可能性を見い出しました。

人と人の関わり合いや繋がり合いが、社会の中で損なわれつつある「絆」や「生きる力」「生きる知恵」を取り戻す鍵ではないかと考えます。

そこで、「NPO法人ゆいツール開発工房^{ラボ}」を設立し、人と人の結びつきを生み出す道具やしくみ（ゆいツール）を開発することで、社会の中にコミュニケーションや学びの機会を増やし、地域でさまざまな人たちがともに学び合う基盤づくり、持続的に活動展開できる環境づくりなどをサポートし、持続可能でいきいきとした地域コミュニティづくりのお手伝いをしていきたいと思っています。

※ゆいツールは、2010年10月に設立され、2011年9月にNPO法人として登録されました。

2. 団体の目的と主な事業

ゆいツール開発工房^{ラボ}は、広く日本や世界の人々に対して、ESD（持続発展教育）プログラム開発をはじめとした教育活動事業等を行うことで、社会の中に世代や立場を越えたコミュニケーションや学び合いの機会を創出し、地域コミュニティの持つ課題（環境破壊、少子高齢化、地域文化の衰退など）の解決や、持続可能な社会構築に寄与することを目的とする。

- (1) ESD（持続発展教育）に関わるプログラム開発事業
- (2) ESD（持続発展教育）に関わる人材育成事業
- (3) ESD（持続発展教育）の社会展開のための事業
- (4) 教育活動、地域活性化事業等を行う他の団体との情報交換及びネットワークの構築事業

【過去の主な事業】

- ・インドネシア・ロンボク島における村ツーリズム開発プログラム（2016年度～2018年度）
- ・インドネシア・ロンボク島における環境保全のための ESD プログラム開発・人材育成事業
（2013年度～2015年度）
- ・インドネシア・スマトラ島の森林保全をテーマとした ESD プログラムの開発
（2012年度～2015年度）

3. 団体の役員

ゆいツール開発工房^{ラボ}は、以下の役員によって運営されている。

理事長	山本 かおり	
副理事長	小嵐 妙	一般社団法人地球温暖化防止全国ネット
理事	松原 裕子	有限会社イリュージョンミル代表取締役
理事	松原 雅裕	デジタルウムプロジェクト！主宰
理事	森 高一	森企画
監事	小山 庄三	

4. 会計報告（2020年5月現在案）

特定非営利活動法人ゆいツール開発工房 貸借対照表（2019年3月31日現在）

（単位：円）

（資産の部）		（負債の部）	
預金（1）	559,011	預かり金（会費関係）	9,000
預金（2）	100,020	預かり金（寄付金）	99,200
		未払い費用	1,200
		（正味財産の部）	
		一般正味財産	549,631
資産合計	659,031	負債・正味財産合計	659,031

2019年度 特定非営利活動に係る事業 活動計算書
2019年4月1日から2020年3月31日まで

特定非営利活動法人ゆいツール開発工^ラ房
(単位:円)

科 目	金 額		
I 経常収益			
1 会費・入金収入			
会費・入金収入			
会費収入(正会員)	60,000		
会費収入(賛助会員)	24,000	84,000	
2 事業収益			
①ESDに関わるプログラム開発事業	0		
②ESDに関わる人材育成事業	1,000,000		
③ESDの社会展開のための事業	15,000	1,015,000	
3 寄付金収入			
寄付金	22,000	22,000	
4 その他収益			
利息	6		
雑収入	5,340	5,346	
経常収益計			1,126,346
II 経常費用			
①ESDに関わるプログラム開発事業			
(1) 人件費	0		
(2) その他経費	0	0	
②ESDに関わる人材育成事業			
(1) 人件費	255,298		
(2) その他経費	863,286	1,118,584	
③ESDの社会展開のための事業			
(1) 人件費	10,000		
(2) その他経費	64,190	74,190	
雑費	18,031	18,031	
経常費用計			1,210,805
当期経常利益額			-84,459
当期正味財産増減額			-84,459
前期繰越正味財産額			549,631
次期繰越正味財産額			465,172

特定非営利活動法人ゆいツール開発工^ラ房 貸借対照表(2020年3月31日現在)

(単位:円)

(資産の部)		(負債の部)	
預金(1)	377,152	預り金(会費関係)	12,000
預金(2)	100,020		
		(正味財産の部)	
		一般正味財産	465,172
資産合計	477,172	負債・正味財産合計	477,172

貸借対照表脚注

- ・預金(1)・預金(2)は預けた銀行別に区分したものである。
- ・預かり金(会費関係)は、正会員会費 6,000円(2020年度分)と賛助会費 6,000円(2020年度分、2021年度分)で、前受けしたものである。

（1）インドネシア・ロンボク島における「ごみ銀行」活動発展プログラム

りそなアジア・オセアニア財団の環境プロジェクト助成を受けて、インドネシア・ロンボク島で、プラスチックごみをはじめとした廃棄物問題を解決する一つの手段として、若者たちを育成し、既存の“ごみ銀行”と協働しながら村での環境教育を進めたり、クリーンアップ活動への参加や観光地でのエコワークショップの実施などを行ったりした。

以下に、主な活動について報告する。

（より詳しい報告は、別紙のりそなアジア・オセアニア財団環境プロジェクト助成報告書に記載）

① エコワークショップの開催

ロンボク島の若者チーム（ドゥルカディ・チーム）が、ロンボク島の2カ所で、プラスチックごみの問題について考えてもらう目的で、エコワークショップを開催した。

*1回目

- 日時／参加者数：
2019年7月18日（木）／観光客6人、地元住民15人程度
- 場所（協働相手）：北ロンボク県ギリ・メノ島
トラッシュ・ヒーロー・メノの活動拠点
- 実施者：ドゥルカディ・チームメンバー（コマン、オパン、マデ、ルス、サムスル）
- 内容：
 - ・不要になったプラスチックの空き袋を活用したキーホルダーづくりを、参加した外国人観光客や地元の人々と一緒に行った。作りながら、材料が廃棄物であることや、それを再利用することでごみを減らすことに役立っていることなどを伝えた。
 - ・エコワークショップに先立ち、チームメンバーはクカイ・ブルスリごみ銀行でキーホルダーの作り方を学んだ。また、当日同ごみ銀行より、プラスチックごみを活用して作った様々なクラフトを借り受け、ワークショップの際に参加者に紹介した。



<考察>

- チームメンバーらは、エコワークショップを通して外国人観光客と交流したり、地元の人たちにプラスチックごみの活用について伝えたりすることができ、活動の意義を感じていた。

*2回目

- 日時／参加者数：
2019年12月16日（月）／中学生35人程度
- 場所（協働相手）：北ロンボク県ギリ・アイル島
ギリ・アイル NURUL YAQIN（ヌルル・ヤキン）イスラム中学校
- 実施者：ドゥルカディ・チームメンバー（コマン、オパン、マデ、ルス、サムスル）
クカイ・ブルスリごみ銀行 スタッフ2名
- 内容：
 - ・クカイ・ブルスリごみ銀行スタッフと協力して実施した。ごみ銀行から、不要品で作ったクラフトを何種類か持ってきてもらい、ごみを活用すれば価値が生まれることを伝えた。
 - ・7月のワークショップで制作したのと同じ、キーホルダーづくりを行った。人数が多かったのと、時間があまりなかったので、グループで協力してひとつ製作した。
 - ・男子よりも女子のほうが熱心に作っていた。



<考察>

- 対象者が地元の中학생であったため、7月の時よりも作り方を教えやすかった。
- 学校の先生からは、この活動にとどまらず引き続き環境教育活動をサポートして欲しい、という言葉ももらった。

【活動の様子】



7月ギリ・メノ島にて（観光客と地元の人向け）



12月ギリ・アイル島にて（中学校にて）

【コメント】

エコワークショップ1回目の協働相手の「トラッシュ・ヒーロー・メノ」は、『事前の広報』『当日のサポート』などでこちらを失望させる場面があり、後日代表と会って話そうとしたときも対応不可能だったため、2回目は場所を変えて実施することにした。

2回目の協働相手は、ギリ・アイル島にある村役場の担当者であったため、コミュニケーションもスムーズに進んだ。

② バリ島へのスタディツアー

バリ島の先進事例を学ぶために、ドゥルカディ・チームメンバーを連れて、バリ島でスタディツアーを実施した。

【日程】

2019年9月4日（水）～6日（金）

【参加者】

ドゥルカディ・チームメンバー（コマン、マデ、オパン、ルス）

日本人大学生（名古屋大学）鈴木颯汰

【目的地】

- a. 「気候変動と森林火災対策センター（元マングローブ情報センター）」
- b. ウブド地区テガル村「コンポストの家」
- c. ウブドのエコホテル（Mana Earthly Paradise）
- d. バリ州バンギル県バンギル地区プングリプラン観光村

【内容】

a. 「気候変動と森林火災対策センター（元マングローブ情報センター）」

初日の夕方、マングローブ林を散策した。翌日の朝、センターのスタッフ、クトゥット・グデさんに、マングローブの生態や機能についてプレゼンをしてもらった。

b. ウブド地区テガル村「コンポストの家」

センター長のスバルディさん他スタッフとディスカッションすることができた。

プラスチックごみを出さないようにと、用意された昼食はバナナの葉っぱで包んだもの、水はセンターに常備しているガラスのグラスに、ウォーターサーバーから注いで提供された。

ごみ問題の深刻さを訴えるビデオを見せてもらったり、住民主体の小さな活動が発展してきた経緯について話を聞いたりした。「ごみはごみではない。資源である」という言葉が印象に残った。

c. ウブドのエコホテル（Mana Earthly Paradise）

ホテルについて説明できるスタッフが不在だったため、山本ができる範囲で説明した。

d. バリ州バンギル県バンギル地区プングリプラン観光村

若者たちの強い希望があり、見学した。多くの観光客がバスで訪れていた。

この村は、村全体が観光対象になっているため、家ごとにお土産や食事などを提供するスタイルだった。村の中はとてもきれいで、バリの伝統的な家や寺院を見学することができた。

【考察】

- a. ロンボクには、マングローブについて学ぶ施設や機会がないため、若者たちは初めて知ることが多かった。例えば、「マングローブという名称の樹木はないこと」「マングローブの木は、普通の樹木の5倍ものCo2を吸収し固定すること」「マングローブは種類によって、根っこも歯の形も種の形状も、生態も様々であること」「マングローブがあることで、エビや魚、カニなどがよく育つこと」「樹種によって、それ一種類だけで森を形成できるもの、他の樹種と一緒にでなければ森を形成できないものがあるということ」など。
- b. 村の規模（財政的な）がロンボクの村とはかけ離れているとは言え、住民主体の活動が発展し、今では各家庭でゴミを分別して、それを回収するシステムが整っていること、コンポストを作る立派な施設を国から譲渡されたことなどを知ることができ、参考になった。

【活動の様子】



クトゥットさんの説明を聞く (a)



展示物見学の様子 (a)



「コンポストの家」運営者と意見交換 (b)



新しい施設を見学 (b)



エコホテル見学の様子 (c)



観光村の様子 (d)

③ コンポストづくり講習会の実施

*1回目

- 日時／場所：2019年9月14日（土）／中部ロンボク県北バトゥクリアン地区ランタン村
- 参加者：チームメンバーのオパンの家族や親戚、村人など10人程度、ドゥルカディ・チーム（コマン、オパン、マデ）日本人学生
- 講師：パイズルさんと奥さん（クカイ・ブルスリごみ銀行）
- 内容：
 - ・落ち葉を中心に作る「グリーンコンポスト」と生ごみも入れられる「高倉式コンポスト」の作り方を指導してもらった。
 - ・「グリーンコンポスト」は落ち葉や家畜の糞などが材料で、発酵液（バナナの木の根、米のとぎ汁、ココナッツ水、ヤシ砂糖、パイナップルなどを混ぜて発酵させたもの）を水に混ぜてかけて、4日ごとに切り返しを行って1ヶ月でできる。
 - ・「高倉式コンポスト」はまず発酵床を作る。米ぬか、もみ殻、土を混ぜたところに、発酵液Aと発酵液Bをかける。発酵液Aは、砂糖、テンペ（大豆の発酵食品）、タペ（キャッサバを発酵させたもの）、ヨーグルトまたはヤクルトなどを水に混ぜて発酵させたもの、発酵液Bは、塩、果物の皮など最低3種類を水に混ぜて発酵させたもの。発酵床を作ってから5日後くらいから生ごみを入れられるようになり、毎日切り返しをして4ヶ月後にできあがる。

*2回目

- 日時／場所：2020年1月7日（火）／東ロンボク県スンバルン地区サジャン村（ルスの家）
- 参加者：スンバルンの農家数名、ドゥルカディ・チーム（ルス）日本人学生
- 講師：ドゥルカディ・チームメンバー（コマン、オパン、マデ）
- 内容：
 - ・9月の講習会で学んだことや、事前にクカイ・ブルスリごみ銀行のパイズルさんに確認したこと、自分で実践してわかったことなどを基に、「高倉式コンポスト」の作り方を指導した。

<考察>

- どちらの講習会でも、参加者は熱心に学んでいた。
- 残念ながら作った高倉コンポストはどれも、完成まで至らず失敗した。

【コメント】

・ゆいツール現地アシスタントも自宅で試したが、最終的に大雨で冠水して失敗した。1月の講習会で作ったコンポストも冠水して失敗した。雨水が入らない場所で作る必要がある。

【活動の様子】



説明するパイズルさん（9月）



コンポストづくり（9月）



ドゥルカディ・チームによるコンポストづくり（1月）



④ 西ヌサトゥンガラ（NTB）州環境森林局でのヒヤリング

NTB州が実施している Zero Waste 運動の内容について、ヒヤリングを行った。

【日程】

2020年1月6日（月）

【参加者】

ドゥルカディ・チームメンバー（マデ）
日本人学生（立命館大学）金井裕香
ヘルラン（ゆいツールドライバー）

【対応者】

NTB州環境森林局シャックルザリさん他2名のスタッフ

【内容】

・2018年から2023年の5年間「Zero Waste」を進めている。（ちょうど現知事の任期）

- ・100%のごみのうち、使い捨てを止めることで30%を削減する目標。70%のごみをきちんと管理する。
- ・1日3,388トンのごみが排出されていて（2018年、州全体で）、そのうち51トンがリサイクルされている。埋め立て地に運ばれているのは641トン。
- ・州政府としては、住民によるごみの分別を徹底させたいと考えている。
- ・毎日オーガニックごみを回収したい。現在BSF（ブラック・ソルジャー・フライ）というハエに生ごみを食べさせる実験がスタートしている。
1kgの幼虫が毎日10kgのごみを食べる。韓国から輸入したハエで、卵を産んだらすぐに死ぬ。現在は、病院・ホテル・モール・市場のオーガニックごみ（1.2トン/日）を集めている。
- ・家庭から出ているごみの60%はオーガニックごみ。オーガニックごみを、「液体コンポスト」「高倉式コンポスト」「みみず堆肥」「土に埋める」「BSF」などの方法で減らしていきたい。
- ・非オーガニックごみは、ごみ銀行に持って行ってもらう。
- ・各地にごみ銀行を増やしたい。現在、新しくできるごみ銀行への支援を進めている。そして、その親となる「親ごみ銀行（廃品を回収する親となるごみ銀行）」も今年中に9つにしたい。（今は3つ）そして、さらにその上にロンボク島とスンバワ島それぞれに親ごみ銀行を統括する「地域ごみ銀行」を設置したい。

【考察】

- ゆいツールからは、支援が新規ごみ銀行に偏っているために生じる問題点と、ごみ銀行への支援金を配分している責任者が不正を行っているという情報を得たこと、などを伝えた。
- また今後、ゆいツールとして学校の教員や村役場のスタッフ向けの研修を行う準備のあることを伝え、Zero Waste活動のために協力し合うことを確認した。

【ヒヤリングの様子】



⑤ 環境教育プログラムのOJTによるトレーニング

9月のバリでのスタディツアーの際に、メンバーにゆいツールオリジナル教材プログラムの紹介を行った。その後、12月と1月に実際に若者たちが子供たちにプログラムを実施しながら、トレーニングを行った。

*1回目

- 日時／実施場所：
2019年12月27日（金）
／西ロンボク県ナルマダ地区ブウン・スジャティ村
- 実施者：ドゥルカディ・チームメンバー（コマン、オパン、マデ、ルス）
ランタン村の若者（トゥリスナ、ティウイ）
- 対象者：
バリ人の子供たち（幼稚園児から高校生くらいまで）15人程度
日本人学生
- 内容：
●実施前に、役割を決め臨んだが、プログラムの内容を十分に理解できていないメンバーは、スムーズに実施できなかった。
●グループワークの際には、メンバーがそれぞれのグループに入って、個別に進めた。子供たちの年齢が幅広かったため、お互いに教えあうことができた。

*2回目

- 日時／実施場所：
2020年1月8日（水）
／東ロンボク県スンバルン地区サジャン村
- 実施者：
ドゥルカディ・チームメンバー（コマン、オパン、マデ、ルス）
日本人学生
- 対象者：
幼稚園の子供たち30人程度
- 内容：
●子供たちの年齢が5歳程度だったため、理解できるように工夫して伝えた。一緒に参加していた先生や親たちにも学びになった。
●同行していた日本人学生も、写真フリップを持つなど役割を与えられ、サポートをした。

<考察>

- 若者たちは、前回の経験から、事前に本格的な練習をする必要性を痛感していたので、前夜に時間をかけて練習した。参加者役は幼稚園児になりきって参加した。

<考察>

- 実施後、別の日に実施した数人で振り返りをした際（参加した日本人学生も一緒に）、写真フリップの内容を変える案や、もう少しゲーム性を高めるとよい、という意見が出た。

<考察>

- 熱心な校長先生のおかげで、9月に引き続きプログラムを実施することができた。

*3回目

- 日時／実施場所：
2020年1月9日（木）
／ブウン・スジャティ村第二公立小学校
- 実施者：
ゆいツール（山本）
ドゥルカディ・チームメンバー（コマン、マデ）
日本人学生
- 対象者：
小学5年生1クラス30人程度
- 内容：
●対象者がプログラムに最適な年齢だったので、スムーズに実施することができた。
●プログラム実施後、校長先生がフォローしてくれた。（環境を汚さないことについて、話をしてくれた）

【活動の様子】



ブウン・スジャティ村で（12月）



幼稚園の子供たちに（1月）



ブウン・スジャティ村の小学校、5年生に（1月）

【コメント】

- ・ゆいツールが以前開発したオリジナル教材プログラムを、ドゥルカディ・チームメンバーに使えるようになってもらい、今後ロンボク島で環境教育活動を進めていく礎にするためにトレーニングを行った。
- ・メンバーたちは、最初は簡単にできると考え準備も疎かだったが、実際に子供たちを前に実施してみて、その難しさを実感し、何をどうやって伝えたら子供たちに伝わるか自分で考えて実施できるようになった。

上記以外では、バリ島での環境調査、クラフトづくり講習会の実施（ブウン・スジャティ村）、クリーンアップ活動への参加、学校での環境教育活動（ブウン・スジャティ村）、エコガーデンづくりを行った。

★総括

1年間を通して、ロンボクの若者グループ「ドゥルカディ・チーム」メンバーを育成してきた。彼らは、2018年度までの事業の中でゆいツールが出会い、あるいは発掘した若者たちであり、ゆいツールと活動を共にする中で、環境問題に興味を持ち学びを深めてきた。

2019年度は、ゆいツールがロンボクにいない間も、若者たちによって環境教育活動（エコワークショップの開催やクリーンアップ活動など）を進めることができた。また、コンポストづ

くりやゆいツールオリジナル教材の使い方などもレクチャーし、彼ら自身が教える立場に立てるようになったことは大きな成果であった。

（2）明治学院大学での講義（5月）

2016年度から毎年依頼されて実施している講義で、今年は4年目となった明治学院大学での講義でゆいツールのロンボク島での活動を紹介した。

【依頼元】 一般社団法人地球・人間環境フォーラム（天野さん）

【日時】 2019年5月9日（木）15：05～16：35（のうち1時間）

【場所】 明治学院大学白金キャンパス

【対象】 法学部3年生300名程度 「世界の環境を考える」という講義の1コマ

【内容】 「インドネシアで活動するNGOの事例

ロンボク島での活動紹介『ごみ問題』『地震災害支援』『村ツーリズム開発』」

- | |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none">1. はじめに（10分）
私自身のこと
隠れテーマ「積極的に他者と関わること、異質なものと出会うこと」2. インドネシアのごみ事情（5分）
～クイズタイム～3. インドネシア独自の取り組み「ごみ銀行」ってなに？（10分）4. 2018年に起こった大地震とその支援（10分）5. 村ツーリズムでごみを減らそう（学生エコツアーへのお誘い）（15分）6. アンケート「今日、一番興味深かったこと」 |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

【コメント】

- ・学生の数がとても多く、クイズで用意した3色フリップ（複数名で1セット）の配布が間に合わなかった。
- ・いつものとおり「ごみ銀行」の仕組みに興味を持った学生がいた一方、2018年度に行った大地震への支援でNPOの存在意義を感じてくれた学生もいた。

【講義の様子】



（3）学生の受け入れ（エコツアーの実施）

6月と9月、12月と1月に、合わせて4名の学生を受け入れ、エコツアーを実施した。
学生2以外は、インドネシア在学または在住中だったため、ツアーコーディネート料は免除とした。

<p>*学生1 2019年5月31日（金）～6月7日（金） ●筑波大学附属坂戸高等学校の学生さん 【バリ島】 ・気候変動と森林火災対策センター（元マングローブインフォーメーションセンター） ・レンボンガン島のマングローブ林 ・エコホテル（ウブド） 【ロンボク島】 ・ごみ銀行見学 ・ランタン村宿泊（断食明け大祭体験）</p>	<p>*学生2 2019年9月3日（火）～9月15日（日） ●名古屋大学の学生さん 【バリ島】 （ロンボクの若者たちと一緒にスタディツアーに参加） ・気候変動と森林火災対策センター ・コンポストの家見学（ウブド） ・エコホテル（ウブド） ・プングリプラン観光村見学 【ロンボク島】 ・ごみ銀行見学 ・ヒンドゥー教の寺院見学 ・スングギビーチクリーンアップ活動参加 ・ギリ・メノ島でシュノーケリング体験 ・ランタン村宿泊（村の暮らし体験） ・ブウン・スジャティ村エコツアー体験 その他</p>
<p>*学生3 2019年12月25日（水）～12月31日（火） ●広島大学の学生さん 【ロンボク島】 ・ごみ銀行見学 ・ブウン・スジャティ村エコツアー体験 ・スングギビーチクリーンアップ活動参加 サキナさんとディスカッション ・プラマ・ニン・プスパ観光ガーデン&教育センター見学 ・ヤシ砂糖の里散策</p>	<p>*学生4 2020年1月2日（木）～1月10日（金） ●立命館大学の学生さん 【ロンボク島】 ・ランタン村宿泊（村の暮らし体験） ・スングギビーチクリーンアップ活動参加 サキナさんとディスカッション ・西ヌサトゥンガラ州の環境森林局訪問 ・ごみ銀行見学 ・スンバルン（高地）へ1泊2日 ・ブウン・スジャティ村の小学校で環境プログラムなど</p>

【ツアーの様子】



学生1（バリのマングローブ林で）



学生1（ごみ銀行見学）



学生2（ヒンドゥー教の寺院見学）



学生2（ブウン・スジャティ村エコツアー）



学生3（ブウン・スジャティ村で）



学生3（ヤシ砂糖の里散策中）



学生4（クリーンアップ活動参加）



学生4（スンバルンの畑で）

NPO 法人ゆいツール開発^ラ工房

〒155-0032

東京都世田谷区代沢 2-19-12

メールアドレス: yuitool@gmail.com

ホームページ: <http://yui-tool.jimdo.com/>

ゆいツールブログ:

<http://blog.goo.ne.jp/yui-tool>

連絡先: 090-4420-6867 (代表携帯)